

令和7年度

入学試験問題（高等学校）

国語

＊解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

〈受験番号の記入について〉

下の記入例にならって解答用紙の「受験番号」欄に受験番号を4けたで記入し、その数字を正しく塗りつぶしてください。

マーク例

良い例	悪い例
	   

（記入例）5041番の場合

受 験 番 号				
	5	0	4	1
0	<input checked="" type="radio"/>	0	0	0
1	<input type="radio"/>	1	1	<input checked="" type="radio"/>
2	<input type="radio"/>	2	2	2
3	<input type="radio"/>	3	3	3
4	<input type="radio"/>	4	<input checked="" type="radio"/>	4
<input checked="" type="radio"/>	5	5	5	5
6	<input type="radio"/>	6	6	6
7	<input type="radio"/>	7	7	7
8	<input type="radio"/>	8	8	8
9	<input type="radio"/>	9	9	9

一 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

人を励ます言葉って何だろう。そもそも、言葉で人を励ますことはできるのか。なん
てことを考え出したのは、二〇一一年の東日本大震災がきっかけだった。

あの頃、テレビや新聞では連日、東北地方の深刻な状況が報じられていた。大津波の
圧倒的な威力。人間のコントロールを超えて暴走した原子力発電所。身も心も傷つき疲
れ果てた人たち。画面に写る被災地の様子は、文字通り筆舌に尽くし難いものだった。

言葉というものはなんて無力なんだろう。いや、言葉を仕事にしているにもかかわらず、
こうした災害に対して何も言えないでいる自分は、なんて卑小な存在なんだろう。
① そうした猛烈な無力感に囚われた。

それでも、せめて言葉について考えることは諦めたくなかった。だから、とにかく
② 目を凝らし、耳を澄ませた。

こうした非常時には、どんな言葉が飛び交うのか。非常時という極限状況は、ほく
らの言葉にどんな影響を及ぼすのか。そうした問題を確かめておきたい。日々、目
③ に入る文字、耳に入る声を必死にかき集めていた。

そこでしばらく気がなったのが、「励まし言葉」という問題だった。

震災直後、テレビのコメンテーターも、公共CMも、いろいろと手探りで「励まし言
葉」を模索していた気がする。

きっと、あの時、多くの人が「被災者の力になりたい」「励ましたい」と願ったこと
だろう。でも、「がんばれ」なんてありきたりな言葉は、被災者に対して失礼な気がする。

励ましたいけど、傷つけない。そんな葛藤からだろうか、みんなシンチョウに、あ
るいは怖々と、言葉を選んでいったように思う。

あれからずっと、モヤモヤと考えて続けてわかったのは、どうやらぼくらが使う日本
語には「純粋に人を励ます言葉」というものが存在しないらしい、ということだった。

『ヘヴン』という小説がある。川上未映子さんが書いた名長編で、中学生の壮絶な「い
じめ」がテーマになっている。

この作品の中に、加害者と被害者が一対一で話し合う場面がある。いじめられている
主人公が、ばったり出会った加害者グループの一人を捕まえて、勇気を振りしぼって話

しかけるといふ場面だ。主人公は震える声で問いかける。どうして君たちは、ぼくに對
して、こんなひどいことができるんだ、と。

ネタバレになるから詳しくは書かないけれど、結論から言うと、主人公は加害者の男
子生徒にコテンパンに言い負かされる。その言い負かされ具合があまりにも圧倒的で、
読んでいて悲しくなったり、腹が立ったり、とにかく感情がぶれにぶれて、正直、読む
のがしんどい場面だ。

実は、ぼくは授業やコウエンの中で、ときどきこの小説を採り上げてワークシヨップ
を開く。そして参加者に短い作文を書いてもらう。テーマは「いじめられている子を励
ます」というものだ。

すると多くの参加者は、「いじめられる側」に同情し、「いじめる側」を許せないと怒
る。本当にメラメラと怒りの炎が見えるくらいにヒートアップする人もいる。

でも、提出された作文を読むと、だいたい六割から七割近くの人は、「いじめる側」
の肩を持つ（この比率はぼくの経験値によるもの）。正確に言うと、理屈としては「い
じめる側」が言っていることに近い文章を書いてくる。心情的には「いじめられる側」
に同情していても、出来上がる文章は「いじめる側」に近くなるのだ。

③ どうしてこんなことが起きるのか。たぶん、「言葉がないこと」が関係している。

「人を励ます言葉」というと、どんなフレーズを思いつくだろうか。

ワークシヨップで出てくる不動のトップ3は「がんばれ」「負けるな」「大丈夫」。他
にもいろいろ出るけど、この三つの地位が揺らぐことはない。

でも、よくよく考えると、「がんばれ」と「負けるな」は、人を叱りつける時にも使う。
「叱咤激励」という四字熟語があるように、日本語では「叱咤」と「激励」はコインの
表裏の関係にある。

一方、「大丈夫」というのも、最近では「④」の意味で使われることが多い。「コ
ーヒーもう一杯飲みますか?」「あ、大丈夫です」といった感じだ。

ぼくらが「励まし表現」の代表格だと思っている言葉は、時と場合によっては、「人
を叱る言葉」や「人と距離をとる言葉」に姿を変える。どうやら日本語には、「どんな
文脈にあてはめても、『人を励ます』という意味だけを持つ言葉」というのは存在しな
いらしい。

ワークショップでも、「いじめられる側」に同情する主旨で書きはじめられた文章が、後半に進むにつれて「こんな奴に負けないでがんばれ」という論調になっていくパターンが多い。

これは裏返すと、「自分を強く持て」ということなんだけど、受け取り方によっては、「いじめられるのはあなたが弱いからいけない」というメッセージにもなる。

「弱いからいけない」——実はこれ、課題小説の中で「いじめる側」が言ってる理屈と、ほとんど同じなのだ。

いまから振り返ってみれば、東日本大震災というのは、普段ぼくらが使っている「励まし言葉」ではまったく対応できない事態だったのだろう。

ひたすら堪え忍ぶ被災者に「がんばれ」は相応しくない（もう限界までがんばっていた）。「負けるな」というのも変だ（被災に「勝ち負け」は関係ない）。「大丈夫だよ」もおかしい（実際「大丈夫」ではなかった人たちがたくさんいた）。

そうこうしているうちに、どこからともなく「ひとりじゃない」というフレーズが出るようになった。被災者を孤立させず、連帯しようという思いを込めた新しい「励まし言葉」だったと思う。

でも、これも使い方次第では「苦しいのはあなただけじゃない（だからガマンしましょう）」という意味になりえてしまう。

⑤ 多くの人に向けられた言葉は、どうしても編み目が粗くなる。一口に「被災者」といっても、実際にそこにいるのはさまざまな事情を抱えた一人ひとりの人間だ。だから、ひとつの言葉が全員の心にぴたりと当てはまるなんてことがあるはずない。「その言葉は今の心情にそぐわない」という人がいれば、そのたびに言葉を探すことが必要だ。

もちろん、震災は言葉だけでなんとかなる問題じゃない。だからといって、言葉は⑥ 次の次でいいわけでもない。

さっきのワークショップで気づいてほしいのは、「どんな場面でも人を励ませる便利な言葉なんてない」ということ。そんな「ドラえもんの秘密道具」みたいな言葉は存在しない。

でも、不思議なもので、ぼくたちは普段から「誰かの言葉に励まされる経験」をしている。やっぱり「言葉が人を励ます」ことは確かにあるのだ。

だから、「言葉は無力だ」と絶望することはない。言葉を信じて、「言葉探し」を続けたい。

（荒井裕樹『まとまらない言葉を生きる』）

問一 部A～Eについて、カタカナは漢字に改め、漢字はその読みを答えなさい。

問四 部③とありますが、それはどのようなことですか。その説明として最も適

当なものを選択し、記号で答えなさい。

問二 部①とありますが、筆者が「無力感に囚われた」のはなぜですか。説明しなさい。

問三 部②とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 地震で傷ついた人々の様子をつぶさに記録し、災害時に必要なものをそろえようとしていたということ。

イ 自分の存在の卑小さを反省し、自分には気に入らない意見にも真剣に向かい合おうとしていたということ。

ウ 言葉の無力さに絶望しながらも、それでも言葉の持つ可能性について一人で考えようとしていたということ。

エ 非常時にどんな言葉が飛び交い、どのような影響を与えるのかを観察し、情報を収集していったということ。

オ これからの社会を生き抜くために、新聞に目を通し、ニュースを見ることを心がけていたということ。

ア 「いじめられる」側が勇気を持って「いじめる側」の人間の非を責めても、立場

の弱い「いじめられる側」の声は多くの場合かき消されてしまうということ。

イ 「いじめる側」の人間を許せないと本気で怒っているのに、提出された作文では多くの人が知らないうちに、「いじめ」を良いことだとするような発言を始めるようになるということ。

ウ 「いじめられる側」に同情して励まそうとしても、最終的には「弱いからいけない」という「いじめる側」と同じ理屈を述べて、いじめる側に味方するような発言になってしまうこと。

エ 「いじめられる」側の人間にどんなに同情していても、直接そのいじめに関係しない立場の人間は、たいていは無責任な発言を繰り返すだけということ。

オ 「いじめる側」の人間に大きな怒りを感じているのに、実際にいじめの現場に出くわすと多くの人は言うべき言葉が見つからず、黙ってしまふということ。

問五 空欄④に入る最も適当な表現を次から選び、記号で答えなさい。

ア no thank you イ your welcome ウ all right

エ how are you オ it is OK

問六 部⑤とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 普段私たちが用いている言葉は非常にあいまいな意味しかもっていないので、日常の言葉で励まそうとしてもその意図が伝わらないことも多いということ。
- イ 人にはそれぞれの事情があるので、不特定多数の人々に言葉が向けられると、その言葉には該当しない人が増えてくるのは仕方がないということ。
- ウ 一つの言葉で多くの人々を救おうとしても、言葉の受け取られ方は様々なので、その言葉に反感を覚える人が出てくるのは当然であるということ。
- エ 言葉は必ずいくつかのニュアンスを持つので、多くの人に語りかけるほど言葉の意味をまったく理解できない人が多くなっていくものであるのだということ。
- オ 様々な事情を抱えた人々に対応した言葉を使おうとすると、話す言葉が多くなったり長くなったりしてしまうのは当たり前であるということ。

問七 部⑥とありますが、この表現に込められた筆者の主張の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 震災のような大きな災害を前にとどのようなことを話していいのか分からなくなるため、言葉よりも行動で示すようにするべきだということ。
- イ どのような立場の人にも当てはまる便利な言葉は今のところ存在しないが、探し続ければ必ずすべての人を幸せにする言葉が見つかるはずだということ。
- ウ 災害などの深刻な場面では言葉の力など高が知れたものであるが、悩んでいる人たちの言葉に耳を傾け話を聞く姿勢は維持するべきだということ。
- エ 特別な場面においては日常で使われている言葉を安易に用いることは控え、普段使わないような言葉を探し続けることが重要であるということ。
- オ 本当に困っている人を励ます言葉を見つけてるのは簡単ではないが、それでも適切な言葉を探し、言葉をかけていくことは大切であるということ。

次の文章は、菅田哲也「武士道シックスティーン」の一節である。「私」(西荻早苗)は、中学校から剣道を始め、高校でも剣道部に入った。そこで、自分を追って同じ高校に進学してきた磯山香織と再会する。磯山は幼い頃から剣道一筋で、全国大会準優勝の実力者だったが、中学校三年生の大会で、無名の「私」にあっさり負けてしまったことをひどく気にしていた。関東大会の予選が近づき、出場選手を決めることになる。以下は、それに続く場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

チームメンバーの、上の方はもうほぼ決まりだった。トップは村浜さん、野沢さんが続いて、河合さん、大森さん、って感じ。これに磯山さんが入って、あと補欠を二人まで登録できるから、私はそこに入れるかな、ちょっと無理かな、というところだろうか。いま河合さんに勝ったのは確かにすごいんだけど、その前に東野さんとか、久野さんには負けてるから、正直、私のチーム入りは微妙だった。ほかの候補は三年の宮田さん、同じく三年の古田さん、二年の上原さん、一年の田村さん、ってところ。どう考えても、その中で私が飛び抜けている部分はない。

案の定、翌日はその四人に私を加えて、五人でリーグ戦みたいになった。私は田村さんに勝って、宮田さんに負けて、古田さん、上原さんと引き分け。ほかの人の結果を見ると、上原さんが三勝一分けでトップ。田村さんは二敗二分けでベケ。古田さんは私と同じで、宮田さんはその次、って感じ。でも、査定試合はその日までだった。

次の日、関東大会団体戦のメンバーは発表された。

「大将、村浜」

「ハイッ」

まあ、当然でしょう。

「副将、河合」

「はい」

うん、渋いポジション。河合さんらしい。

「中堅、野沢」

「はいッ」

おお、ポイントゲッター、野沢さんは真ん中か。

「次鋒、大森」

「ハイッ」

うんうん。ということは、

「先鋒、磯山」

「……はい」

そう。そういうことだよな。やっぱりすごい、磯山さん。

「補欠は、上原」

うっ、あともう一人。

「……と、西荻」

その瞬間^①、全身の血がソーダになった。シユワーツと上に昇って、ひと粒ひと粒弾けていく。日本舞踊をやっているときに、「次は『藤娘』やってみようか」といわれたときと同じくらい嬉しい。

「よかったね、西荻さん」

隣の河合さんが、ぼんと私の胸を叩いた。

「ああ、はい……ありがとう、ございます」

でも、喜べたのは一瞬だった。古田さん、宮田さん、田村さんがチームから漏れることになって、申し訳ないっていう想いが、すぐに湧き上がってきた。確かに、ここ数日の対戦では私の方がいい感じだったかもしれない。でも、これからずっとあの調子でやっていけるかどうかは、正直分らない。

まあ、あくまでも補欠だから、まず実際に試合に出ることはないと思うけど、でも、責任は少なからずある。選ばれなかった人たちに、恥ずかしくない選手にならなければならぬ。

うん。これはちょっと、気を引き締めてかからねば。

たまには一緒に帰ろう、って、磯山さんに声をかけてみた。

彼女は選手に選ばれたんだから、機嫌が悪いはずはないと思ったし、私が「乱暴はやめようね」っていつて以来、そういう試合はしなくなったわけだから、そんなに私のことも嫌いじゃないっていうか、少なくとも防具なしでもぶっ叩いてやる、みたいにはもう

思っていないだろうという、私なりの打算もあった。

「ああ……」

返事は、こんな感じ。でもほら、拒否はしていない。はつきり「うん」といわないのは、単なる照れでしょう。ちよつと磯山さんって、シャイなところがあるんだと思う。

バスの中で、まだ地元道場に通ってるのって訊いたら、今は時間的に無理、っていわれた。あれは、中学が地元だからできてたんだ、って。確かにそうだと思う。私だって、家に帰ったら八時半を過ぎちゃう。その途中、別の道場に寄るなんて現実的に不可能。

だいたい、そういう道場が何時頃までやってるものか知らないけど、さすがに十時、十一時まではやらないと思う。そんなことしたら、絶対近所迷惑になる。竹刀しなひの音って、けっこうバチバチうるさいから。

「……そんなことよりさ」

磯山さんは、吊り革を持ち替えながら切り出した。

「ん？ なに？」

「お前、あの河合に勝つといて、なんで宮田に負けたり、古田と分けたりするんだよ」

河合さんはチームの副将、宮田さんと古田さんは補欠落ち。確かに、安定感に欠ける戦績だと、自分でも思う。

「……ってどうか、先輩のこと呼び捨てにしちゃ駄目だよ」

「そんなの、お前が黙つときゃいい話だろ。内緒にしとけよ」

まったく。ワルぶっちゃって。ほんとはシャイなくせに。

「うーん……なんでっていわれても、私にもよく分かんないよ。河合さんに勝っちゃったのも、まぐれなんじゃないかな」

すると、また例の注3三白眼さんびやくがんで睨にらまれた。

「……あたしもまぐれ、河合もまぐれで負けたのかい」

「すぐそういう、棘とげのある言い方する……河合さんは、そんな恨みうらみがましい言い方なかったわよ。あなたは、あなたの思う通りにやればいいって、いってくれたよ」

あ。もしかして私、また怒らせることいっちゃった？

いや、大丈夫そうだ。()を尖らせただけで、睨にらんではこない。

「……あたしは不満だね。河合に負けるならともかく、勝つて他のに負けたり分けたりするのは、絶対納得いかない」

「別に私は、磯山さんに納得してもらうために剣道やってるんじゃないもん」

マズい。今度は睨にらまれた。なんか、この人の「怒りのツボ」って、私にはよく分からない。

「あのさ……その、タメなのに、さん付けさんづけで呼ぶの、とりあえずやめろよ」
なんだ。ツボはそっちか。

「えー、いきなり呼び捨てとか、私できないよ」

「あたしがいいっていつてんだからいいだろが」

「だったら……たとえば、香織ちゃん、とかの方が」

三白眼、さらに吊り上がる。

「テメエ。そう呼んだら、今度は後ろから木刀でぶん殴るぞ」

お気に召しませんか。

「じゃあ、香織さん、とか」

「キホン、さん付けさんづけをよせつつってんだよ」

「なんでよ。いいじゃない。親しき中にも礼儀ありだよ」

親しき、辺りにツッコミが入るかと思いきや、違った。

「……あなたはあたしに勝ったんだ。あたしを呼び捨てにする資格が、あなたにはあるんだよ」

ははあ。結局この人は、その考え方から離れられないわけね。

「ねえ……ちよつと訊きいていい？ どうして磯山さんは、そんなに勝ち負けかちまけに拘こだるの？」

「お前が拘こだらなさすぎるんだよ。もうちよつと真剣に、剣道のこと考えろよ。勝敗かちまけに拘こだれよ」

「私はいつだって真剣にやっています。剣道についてだって、いっぱい、いろいろ考えてます」

「③だったら格下に負けんよ。そんなの、手え抜ぬいてる証しるし拠ただろ」

格下かくかって、そんな。

「別に、宮田さんや古田さんが、私の下したってわけじゃないでしょ。そもそも私、そうやって人に格付けして、見下みくだしたりするの好きじゃない」

駅えきに着いた。先に降りる。

「待てよ……お前、なにバカばかいつてんだよ。勝つたら上、負けたら下。誰にも負けなかつたら優勝、一回でも負けたらそこで終わり。それが剣道だろが。勝負つてもんだらうが」
「違う違う。それだけが剣道じゃない。もっと他の楽しみ方たのしみかただってあるし、喜びよろこびだつて

ある」

つられて、私もつい熱くなった。声が大きくなってる。すれ違う人たちが、こつちをチラチラ見てる。

「なんだよ、他の楽しみって」

しつこいなあ、もお。

「それは……新しい技ができるようになったり、もつと綺麗に見える構えを発見したり、先輩のいいところ真似したり、気持ちのいい一本が打てたり、いろいろあるでしょう」

「そんなの、いくらあつたつて勝ちに繋がらなきゃ意味ないだろ」

「もういいよ。やめようよ」

地下一階の改札を通り、さらに地下二階のホームまで下りる。

「よくないよ。お前がもつと真剣にやれば、ガツツと気合い入れてやれば、絶対もつと強くなるはずなんだよ」

「はいはい、申し訳ございませんね。気合いが足りなくて」

このエスカレーターって、こんなに遅かったっけ。

「少なくとも、あんなへボ連中に取りこぼしたりはしなくなる」

「先輩のこと悪くいわないで」

「お前が弱い、あたしは嫌なんだよ」

なに勝手なこといってんのよ。っていうか大きな声出さないでよ、こんな公衆の面前で、つていおうと思っただけで、

「磯山さん……」

振り返って見た、彼女の表情が、なんか、とても切なく見えて。私はそれ以上、何もいえなくなつた。

「嫌なんだよ……お前が……あたしが、本気で負けたと思つたお前が、実は弱かつたなんて……あたし、そんなふうには、思いたくないんだ……」

確かに私は、勝敗には拘らない。むしろそういう価値観から、自分を遠ざけようとする思っている。テニスや水泳で考えると分かりやすい。純然たる楽しみで、そのスポーツをやること自体が喜び、みたいな、そういうスタンスだつて、ちゃんとあると思う。

でも、いま私がつている剣道に、勝敗がついて回るのは厳然たる事実。特に東松学園高校は、剣道では男女共に、全国クラスの実績を誇る実力校だから、勝敗を度外視し

て、体を動かしたいって程度の楽しみでやっちゃいけないんだつていわれれば、それも理解はできる。

だから、私だつて一所懸命やつてる。勝ちがすべてではないけれど、勝てるように、勝つための努力は、できるだけしている。でも、それだけじゃ駄目なの？ それだけじゃ、あなたは私の剣道を認めてはくれないの？ 河合先輩はそれでもいいつていくれたけど、あなたは、それじゃ不満なの？

むしろ、勝敗という呪縛じゆばくに囚とらわれているあなたの方が、私には少し、哀れに思える。ほんとはもつと楽しいはずの剣道を、あなた自身がつまらなく、息苦しい、ギスギスしたものに変わってしまったつていえるように見える。それは、とても悲しいことだと思つた。

剣道を始めてたつた三年の私が、全国レベルの実力者であるあなたにとやかくいうべきでないことは、^(c)も承知している。だから、いわない。いわないけど、もつと他の見方もあるつてことに、気づいてほしいとは思つた。⁽⁵⁾私と同じ価値観にならなくてもいい。でも、違う道があることは、認めてほしい。

地下鉄に乗り、横浜駅で降り、磯山さんとはJ Rの改札前で別れた。

「じゃ、また明日ね」

「うん……」

相変わらず、肩はんにに般若の竹刀袋を担いでいる。でもその背中が、今日はなんだか、ひどく小さく見えた。

なんなんだらう。この感じは。

注1 大将——剣道の団体戦で、最終試合を務める選手のこと。基本的に、チームで最も強い選手が選ばれる。5人制団体戦は、先鋒↓次鋒↓中堅↓副将

↓大将の順番となる。

注2 日本舞踊——歌舞伎から派生した伝統芸能。「藤娘」はその演目の一つ。「私」は、中学校入学までは日本舞踊を習っていた。

注3 三白眼——黒目が上に片寄つて、左右と下方の三方が白目になつていような目。

問一 (1) 部 a・c の () に当てはまる言葉を、それぞれ後から選んで記号で

答えなさい。

a () を尖らせた

ア 目 イ 口 ウ 頬ほお エ 爪つめ オ 肘ひじ

c () も承知

ア 一 イ 十 ウ 百 エ 千 オ 万

(2) 部 b 「度外視して」の本文中における意味として最も適当なものを次

から選び、記号で答えなさい。

ア 考えに入れないで イ 根拠にしないで

ウ 明らかにして エ 人のせいにして

オ 重視して

問三 部②とありますが、この時の「私」の心情として、最も適当なものを次か

ら選び、記号で答えなさい。

ア 補欠では大会に出られる可能性は低いため、正規の大会メンバーに入れるように、もっと練習をして強くならなくてはならないと気合を入れている。

イ 同じ一年の磯山が正規メンバーに選ばれた一方、自分は補欠だったため、これ以上差をつけられないように、もっと頑張らなくてはならないと焦っている。

ウ 自分が補欠になったことで選ばれなかった部員がいることにも思い至って、その選手たちの思いに込めるべく、より精進しなければならぬと考えている。

エ 補欠とはいえメンバーに選ばれた以上、その責任は果たすために、これまで手を抜いていた練習にも、真剣に取り組まなければならないと反省している。

オ 自分は補欠にしかねないのかと落ち込んでいたが、尊敬する河合さんに励まされたことで、少しでもチームに貢献しようと前向きな気持ちを取り戻している。

問四 部③とありますが、磯山がこのように言う理由として、最も適当なものを

次から選び、記号で答えなさい。

ア 直喩ちよくゆ イ 隱喩いんゆ ウ 擬人法 エ 倒置法 オ 換喩かんゆ

問二 部①に用いられている表現技法を次から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 直喩ちよくゆ イ 隱喩いんゆ ウ 擬人法 エ 倒置法 オ 換喩かんゆ

ア 剣道一筋に打ち込んできた磯山からすれば、お気楽な「私」の剣道は剣道そのもののへの侮辱でしかなく、絶対に許せないから。

イ 勝負の世界に年齢も上下関係もないはずなのに、先輩に気を遣って、わざと負けたりする「私」のやり方が気に入らないから。

ウ 磯山のライバルになりうる才能を秘めた「私」が、きつい練習を嫌がって、本気で剣道に取り組まないことに腹を立てているから。

エ 「私」が実は弱ければ、「私」に負けた磯山も弱いということになってしまい、勝敗に拘こだまる磯山は、それを事実として認めたくないから。

オ 「私」がいつまでたっても「さん付け」をやめないのだから、「私」の一挙一動にケチをつけたい気分になっているから。

問五 部④とありますが、「私」が「悲しいことだと思う」のはなぜですか。説明しなさい。

問六 部⑤とありますが、「私」の考え方がよく表れた箇所を本文から三十五字以上四十字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問七 本文の表現の特徴として適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大会メンバー発表の場面では、短い文を連続させることでテンポよく展開を進めると同時に、緊張感を生み出している。

イ 「ワルぶる」「タメ」「っていうか」など、話し言葉が多用されており、読者が文章に親しみを感じやすくなっている。

ウ 「……」を会話中に用いることで、言いよんだり、言葉を失ったりしたための間があることを表現している。

エ 磯山の一人称を「あたし」にしたり、男性的な言葉遣いにしたりすることで、「私」とは対照的な性格であることを表している。

オ 「私」の視点からだけでなく、磯山の視点からも描かれており、二人の考え方の違いが分かりやすくなっている。

問五 部⑥とは何のことを言ったものか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア お手本 イ 手柄 ウ 野原 エ 水たまり

問六 空欄(⑦)に入る言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア けら イ けり ウ ける エ けれ

四

文学史に関する次の各問いに答えなさい。

(1) 日本が世界に誇る長編物語『源氏物語』の作者は次のうちどれか。記号で答えなさい。

- ア 藤原道綱母
- イ 清少納言
- ウ 紫式部
- エ 赤染衛門
- オ 和泉式部

(2) 鴨長明によって著され、日本三大随筆の一つに数えられる作品は次のうちどれか。記号で答えなさい。

- ア 『枕草子』
- イ 『方丈記』
- ウ 『徒然草』
- エ 『風姿花伝』
- オ 『折たく柴の記』

(3) 夏目漱石の作品として適当でないものは次のうちどれか。記号で答えなさい。

- ア 『吾輩は猫である』
- イ 『坊ちゃん』
- ウ 『舞姫』
- エ 『三四郎』
- オ 『こころ』

(4) 明治期に「写実主義」を提唱して俳句・短歌の革新運動を行った人物は次のうちどれか。記号で答えなさい。

- ア 正岡子規
- イ 与謝野鉄幹
- ウ 森鷗外
- エ 石川啄木
- オ 島崎藤村

(5) 二〇二四年に没後百年を迎えた作家で、『変身』や『審判』、『城』など人間存在の不条理を主題とするシュルレアリスム風の作品で有名な人物は次のどれか。記号で答えなさい。

- ア ドストエフスキー
- イ マルクス
- ウ デフォー
- エ ヘミングウェイ
- オ カフカ